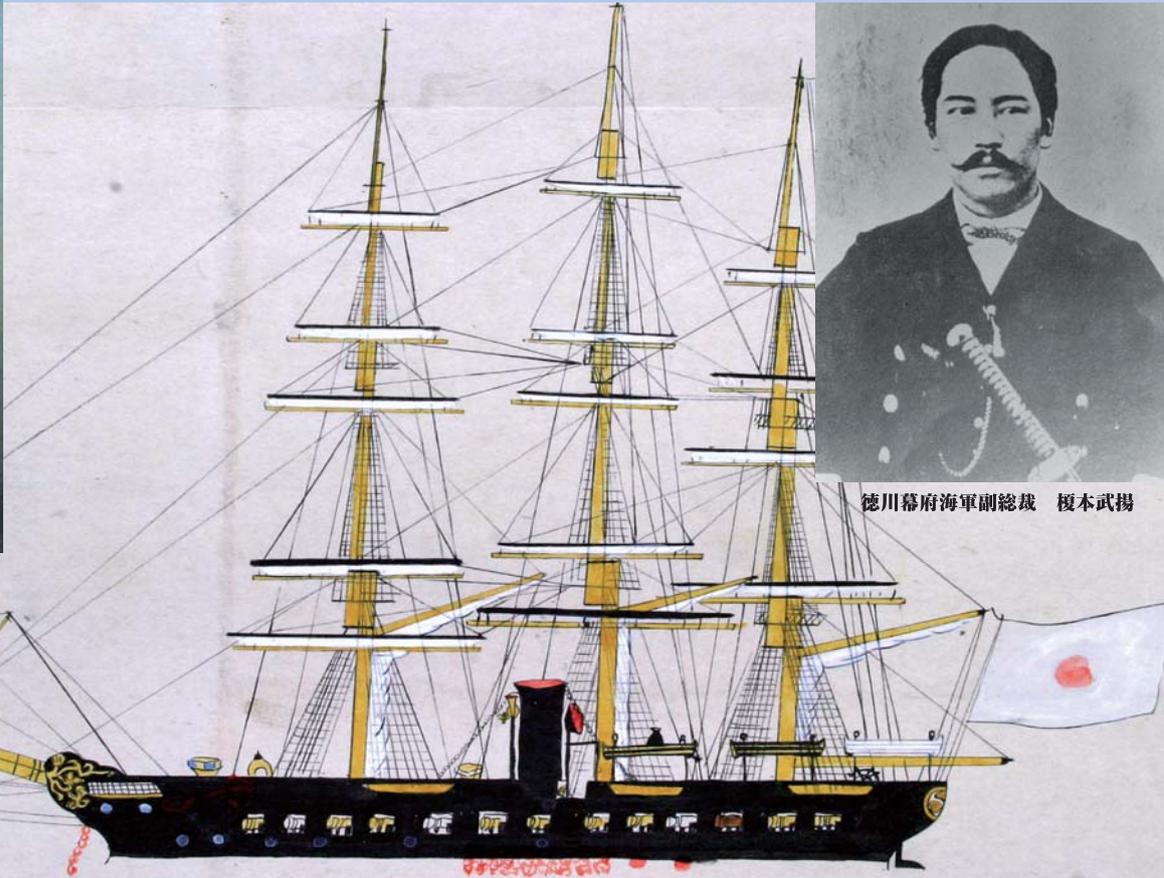


幕末最強の軍艦

開陽丸と塩竈



幕府フランス軍事顧問
ール・ブリュネ砲兵大尉



徳川幕府海軍副總裁 榎本武揚

徳川の軍艦 開陽



明治初年の鹽竈神社・表坂

特定非営利活動法人
～ NPOみなとしほがま～

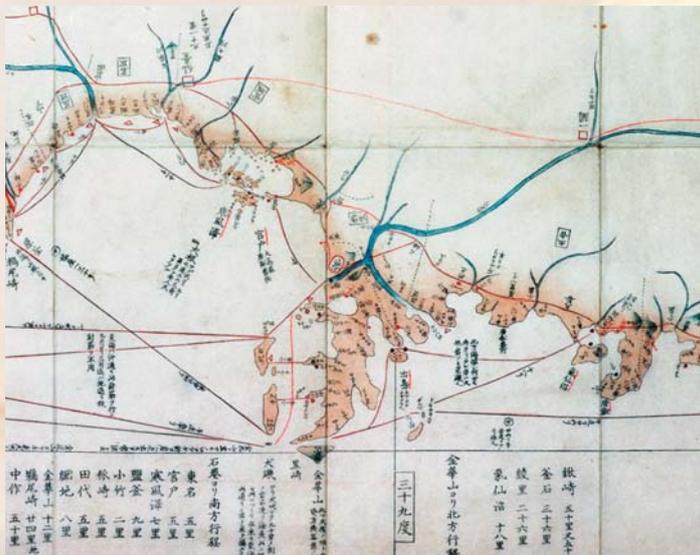


荒波を航海する開陽丸

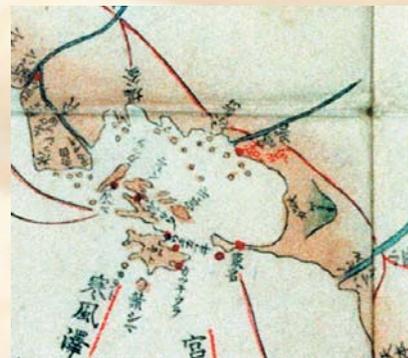
江差町教育委員会 提供

「目次」

1. はじめに	2
2. 江戸品川沖を脱出	3
3. 榎本艦隊	3
4. 榎本艦隊、塩竈に到着	4
5. 榎本・土方歳三ら『奥羽越列藩同盟』の軍議に参加	7
6. 青い目のサムライ『ジュール・ブリュネ』	8
7. ブリュネの足跡をたどる	10
8. ブリュネ、軍人としての生涯	15
9. 開陽丸『鷲ノ木沖』に投錨 榎本ら五稜郭へ入場	16
10. 『開陽丸』 江差沖に眠る	18
11. 幕末最強の軍艦『開陽丸』	19
12. 『開陽丸』の遺品を発掘・復元	20



改正東海舟程全図
松竹深処作。天保11年(1840)



左図中央の拡大図

榎本艦隊が寄港した松島湾

石巻市教育委員会 蔵

仙台藩の諸廻船(千石船)の安全な運航を目的として、仙台藩領と江戸との往復の航海に役立てるために作成された東廻り航路図である。本図は、水戸藩の地理学者長久保赤水が安永8年(1779)に刊行した『大日本與地路程全図』を基に、石巻の一人の船乗りの長い間の経験から得た知識を書き記した書物から得た状況(浅瀬や岩礁・港湾の便など)を書き加え、作成したものである。

本図は西洋式の経緯線入りで、それまでの航路図からみれば極めて厳密なものと言え、鉾ヶ崎(現宮古市)から静岡県までを描く。なお、作者の松竹深処については不詳であるが、仙台藩士かと思われる。

1. はじめに

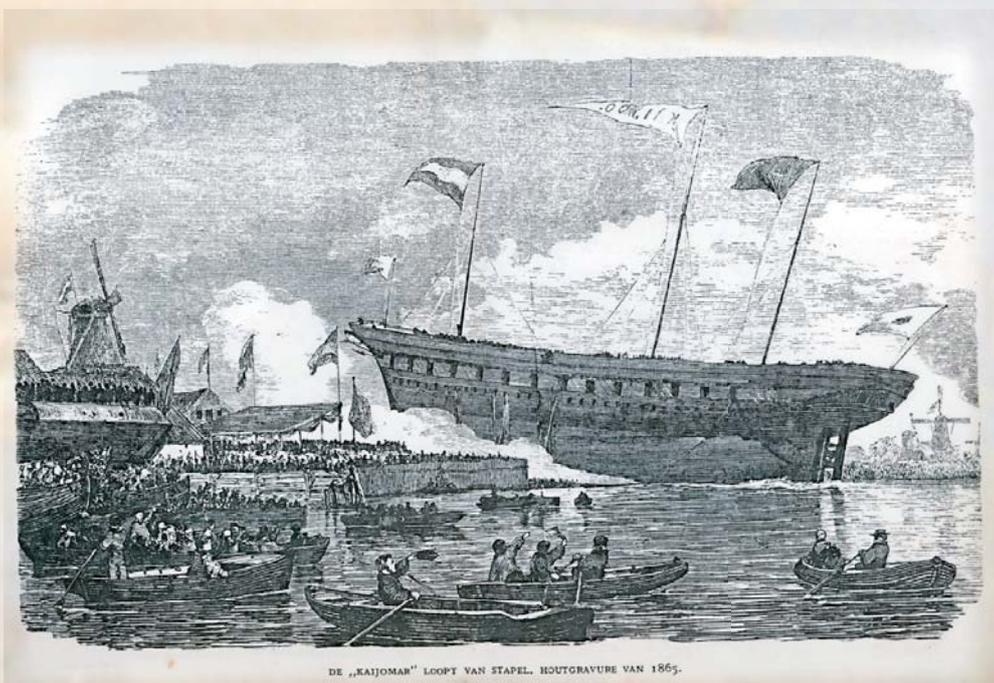
今から141年前、1868年（慶応4）鳥羽伏見の戦いを発端とした、薩摩長州を中心とする明治新政府により、徳川幕府勢力を一掃する戊辰戦争が始まり、日本は近代的な中央集権国家の道を歩み始める明治維新が起こりました。

幕府海軍副総裁榎本武揚^{えのもとたけあき}は、北の大地に蝦夷地共和国^{えぞち}の建国を目指し、さまざまな思いを秘めて一隻の船「開陽丸」^{かいようまる}に夢を託し、途中塩竈に寄港しました。

開陽丸は、徳川幕府が海軍増強のため、オランダに建造を依頼した軍艦で、愛称は"Voorlihter"（夜明け前）。進水式の新聞、雑誌の記事には、「民間の造船会社が最大の船を進水した。」と、大きな関心を集めた当時最強の軍艦でした。

26歳で最新の海軍学などを学ぶためオランダに留学していた榎本ら9名は、開陽丸に乗込み、1866年（慶応2）12月にブリッシンゲンを出航し、大西洋、インド洋を経由し、1867年（慶応3）4月横浜に到着、徳川幕府の旗艦^{きかん}として引き渡されました。

開陽丸と榎本武揚や新撰組の土方歳三^{こもんだん}、フランス軍事顧問団のジュール・ブリユネら榎本艦隊乗組員と当時の塩竈や宮城県との関わりについてその一端をご紹介します。



オランダの雑誌ネーダーランス・マガゼイン紙に掲載された開陽丸進水式の様子
(国立オランダ文書館付属図書館蔵)

江差町教育委員会 提供

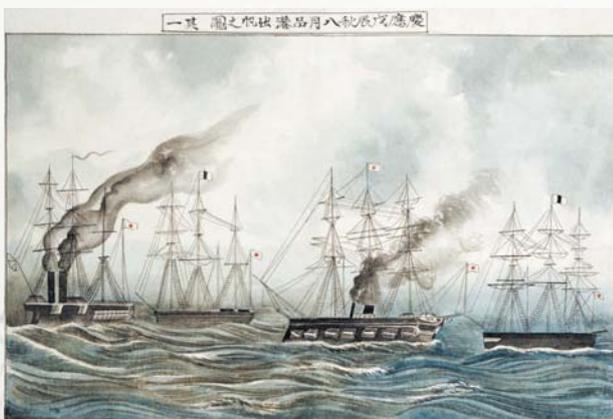
2. 江戸品川沖を脱出

1868年（慶応4）4月、江戸城の無血開城により、新政府軍から開陽丸の引き渡しを命じられた榎本武揚（当時33歳）は、旧幕府軍約2,000人と共に、開陽丸を旗艦として8隻の船に乗り込み、一路塩竈を目指し、江戸品川沖を脱出しました。

途中、銚子沖で暴風雨に遭い、太平洋を横断した咸臨丸など2隻の船を失いながらも、最初に長鯨丸が塩竈の浦戸石浜に到着しました。



徳川幕府海軍副総裁
榎本武揚



慶応戊辰八月品川港出帆之図 「麦叢録」より



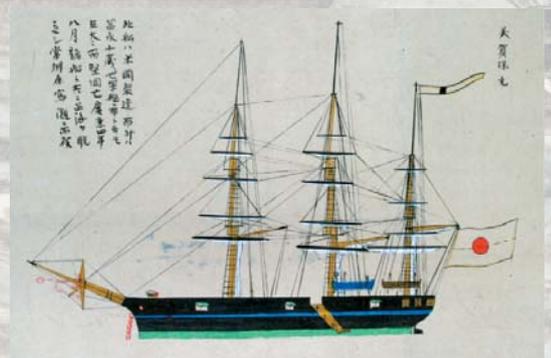
函館市中央図書館 蔵

3. 榎本艦隊

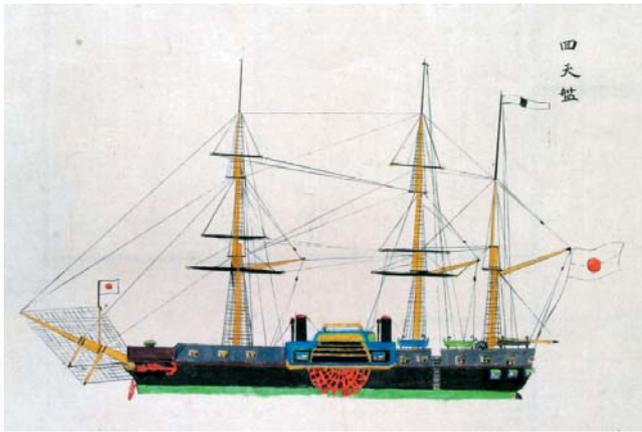
品川沖から脱出した榎本艦隊は、「開陽」を旗艦とし、宮古湾奇襲作戦の主力艦「回天」、日本最初の太平洋横断を遂行した「咸臨」、塩竈の石浜に一番着した「長鯨」、函館を巡航中に座礁した「千代田形」、江差で座礁した開陽を救援に向かった「神速」、元イギリス国女王陛下のお召し艦であった「幡龍」、そして「美賀保」の8隻でした。



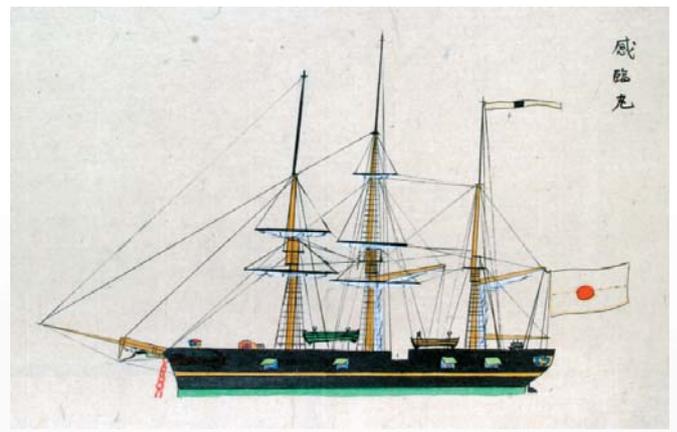
徳川軍艦 開陽艦



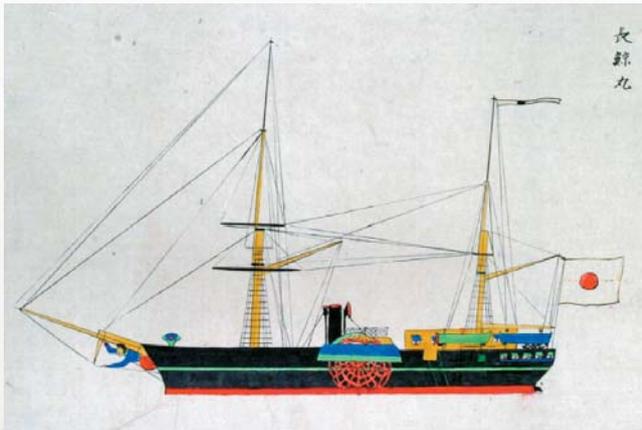
美賀保丸



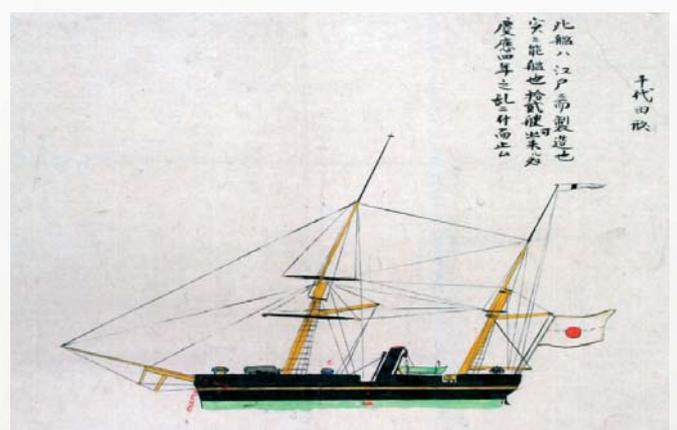
回天艦



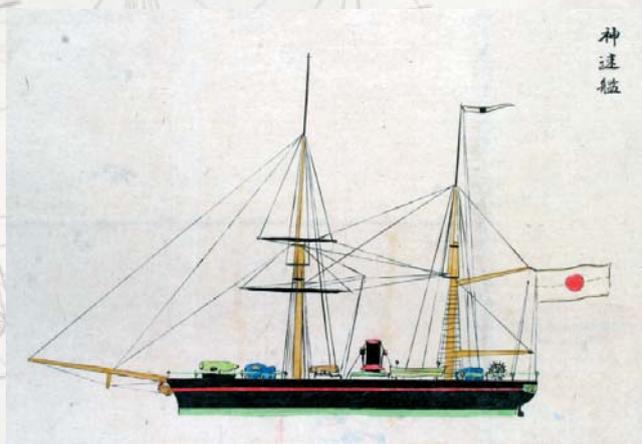
咸臨丸



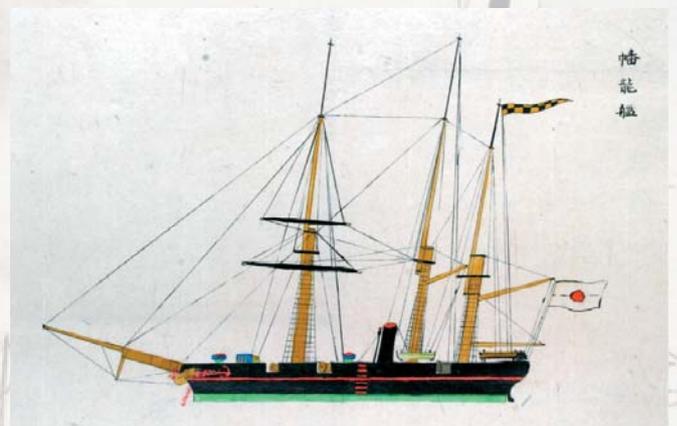
長鯨丸



千代田形



神速艦



幡龍艦

函館市中央図書館 蔵

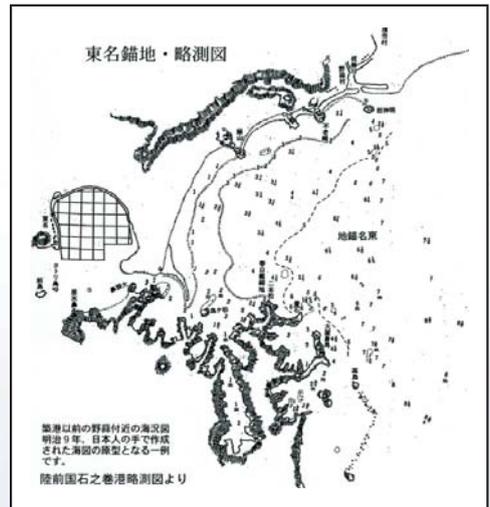
4. 榎本艦隊、塩竈に到着

乗り込んでいた将校杉浦清介の「^{こうせい}苟生日記」によれば、「8月24日午後3時、石浜水道に入港。」「8月25日^{きよもく}微雨微寒。布島（野々島）上陸。」「8月26日^{どうあん}ソンドイ（日曜日）^{あん}桂島ニイタル。コノトキ^{いかり}拳目、都下人島中ニ満チ状態トウテイ^{あん}儉安、タダ嘆ズルノミ。」と記しています。開陽丸は8月28日、東名に到着。同日、松島湾内を仙台藩宮城丸に曳航され、翌29日石浜に^{いかり}錨をおろしました。



(行發尾商船本) む望な山リモツ及石時雨濱石 (所名戸浦内河嶋松)

明治後期の石浜港



開陽丸が到着した東名(現・野蒜沖)
のびる

当時の寒風沢は、江戸への幕府直轄領の年貢米や、仙台米の千石船の出航地として栄え、損傷した船の補修資材を運搬してくるのに便利な港でした。また、船の燃料として必要な薪炭も南部方面から大量に運搬してくることが可能で、食料の米は幕府直轄蔵や仙台藩倉庫より補給することが出来ました。

島の口伝によれば、榎本から、寒風沢の浦役人であった長南清八郎に、各艦の修理について協力の依頼があり、肝入りらが集められ、その分担が定められました。船の修理にあたっては、石浜の船大工だけではならず、塩竈、石巻、気仙沼、南部藩や岩代藩から応援の大工を募り、約200人の職人が昼夜交代で修理をおこなったと伝わっています。



(行發尾商船本) 景全るた見りよ山和日 湾風寒 (所名戸浦内河嶋松)



大正時代の寒風沢



現在の寒風沢

榎本艦隊の滞在中は、飲料水や蒸気機関用の水には相当な苦勞があり、高瀬舟や平田舟を改良した水舟（給水舟）数10隻が高城川上流や、利府浜田の山峡の流水を一日数回運搬したといひます。

また、近在からは煎売舟が酒、肴、餅、果物、青物野菜、漬物を売るため約50隻の舟が来島し、軍艦も島内も大盛況をきわめ、漁師達が毎日獲る魚では足りなかったといひます。また、榎本艦隊の隊員は、浜に出て演習を行っていたといひます。

米倉は武器弾薬庫に使用され、隊員達は各戸に割当てられて宿泊し、島民は毎日数回、軍船との連絡のために小舟を差出す割当があり、大変忙しかつたといひます。隊員からは家族への手紙や金銭の送り届けを託され、その約束を果たしたといひ、出港の際に榎本らは、島民に相応の謝金を支払つたとも伝わっています。

新撰組副長の土方歳三が合流した際、石浜などで船の燃料とするため松を伐採していたところ、「松島の景観を汚すことはするな」との指示を出し、松の切り出しをやめさせたとも伝わっています。石浜水道から背後の津森山を眺めると、今でも植生が変わる線を見ることができ、土方の指示がなければ、現在の景観と違つたものとなつており、動乱の中でも、松島の景観を思いやる土方の人柄をしのばせる逸話が伝わっています。



明治時代の石浜



石浜錨地（明治9年）
陸前国石之巻港略測図より



現在の石浜



幕末当時の面影を残す明治15年以前の塩竈の町並み（中央の川は現在埋立られた「祓川」）

5. 榎本・土方歳三ら『奥羽越列藩同盟』の軍議に参加

当時の仙台藩は、新政府軍に対抗し、仙台藩や米沢藩を中心に新たな北部政権の樹立を目的とした「奥羽越列藩同盟」を組織していました。しかし、新政府軍の新潟港の軍事占拠、長岡城の落城、そして二本松の落城と敗戦が続き、仙台藩では新政府軍に抵抗する勢力と降伏する勢力（恭順派）とが対立していました。1868年（慶応4）9月3日、藩主伊達慶邦の命令により、同盟列藩の合同軍事会議が開催され、榎本や旧幕府フランス軍事顧問団のブリュネやカズヌーブ、そして新撰組の土方歳三などが参加しました。翌4日から6日にかけての3日間ぶつ通しのはげしい議論の末、降伏謝罪に大きく傾き、これを聞いた榎本は、土方を伴い登城して恭順派の遠藤文七郎らと面会し、徹底抗戦を強く訴えましたが拒否されました。そして、15日仙台藩は謝罪降伏嘆願書を提出し、奥羽越列藩同盟は完全に崩壊しました。



新撰組副長 土方歳三



明治前期の「仙台城と広瀬川大橋」



戦前の「大手門と隅櫓」

6. 青い目のサムライ『ジュール・ブリュネ』

1866年（慶応2）11月、幕府の要請によりフランスのナポレオン三世は、シャノワヌ団長以下、15人の精鋭から成る軍事顧問団を日本に送ることを決定しました。その中に砲兵科教官として「ジュール・ブリュネ」が参加していました。

顧問団が到着し、軍事伝習開始1年足らずで鳥羽伏見の戦いが勃発し、顧問団は帰国することになりました。しかし、ブリュネら5人のフランス人は、旧幕府軍の教え子達を最後まで助けると約束し、また騎士道^{よゆうせい}の精神と奥羽越列藩同盟からの軍事顧問就任の要請に^{よゆうせい}応え、ナポレオン三世

に脱走の決意を綴った手紙を残し、榎本らと一緒に品川沖を脱出しました。また、彼は画を描く技術について抜群の才能をもち、立ち寄った所々をスケッチ画で描いていました。



ジュール・ブリュネの肖像画
咸臨丸子孫の会 提供

ジュール・ブリュネの手紙

陛下

陛下の御命令により日本へ派遣された私は、私の同僚達と共に、陛下の御意に添うべく力を尽くしておりますが、日本の革命（注＝戊辰戦争）によって、軍事顧問団はフランスへ帰国を余儀なくされる状況となりました。しかしながら私は日本に留まり、フランスに好意をよせる北の大名たち（奥羽越列藩同盟）とともに、我が顧問団が達成した成果を明らかにする覚悟であります。

北の大名たち（奥羽越列藩同盟）は、私に南の大名たち（薩摩・長州）に対抗する組織の中心になってくれるように求めており、私は求めを受け容れました。

なぜなら、私達顧問団が授けた約千人の日本の士官・下士官達の助けがありさえすれば、私には（奥羽越列藩）同盟軍の5万の兵をも指揮することが可能だからであります。

顧問団全員をフランスに連れ帰る任務を与えられた顧問団長シャノワンヌ大尉。大事件（戊辰戦争）に際して表立って幕軍に協力できないウトレイ公使を巻き添えにしないためにも、私は辞表を残して横浜から立ち去るべきと考えたのであります。

私はたしかにフランス軍士官としての私の将来を危険にさらしております。しかし私は幕軍と共に戦う決心をするにあたり、彼らが必ずや私の助言に従うであろうという確信を抱くことができたのであります。日本人がヨーロッパ人に対して、かくも大きな信頼をよせたことはかつてなかったことでありましょう。彼らの信頼に応えることは、ひいては陛下にお仕えすることにつながると私は信じたのであります。心ならずも軍規に違反した私をお許しくさいますように。

この違反は重大なものであることは私も承知しております。なぜなら私は、陸軍大臣閣下の承諾なしに自由な行動をとってはならなかったからであります。しかし陸軍大臣閣下の承認がこの国に届くまでの6カ月間、ただ坐して待つことは、軍事行動における好機をいたずらに逸することにつながることでありましょう。

南の大名たちはすでに疲労が見え始めており、内紛が彼らの力を殺いでいるとはいえ、われらの行く道は困難なものであります。反フランスの立場をとる南の大名たちの中には自国軍より除隊もしくは辞職した多くのアメリカ・イギリスの士官達が参加しております。私は、陛下が御自ら私に賜った十字架に誓って、この国にフランスの大儀を広めるために全力を尽くすことを誓うものであります。もし、幸いにして陛下が私のささやかな行動を良いと思われるならば、私にとってこれに勝る慰めはありません。

横浜 1968年10月4日

陛下の忠実な臣、ジュール・ブリュネ砲兵大尉 日本にて



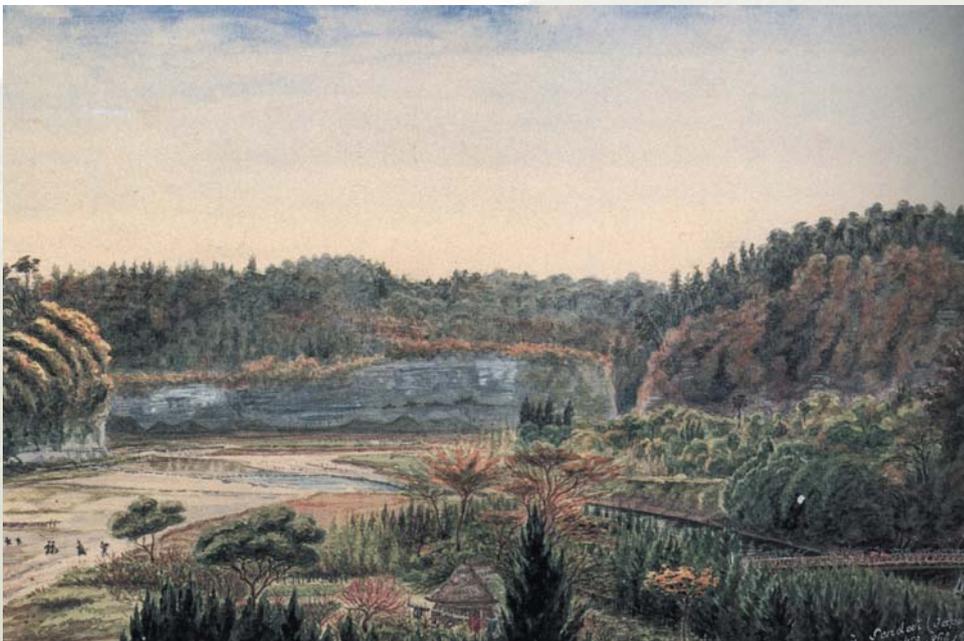
フランス人教官と教え子達

前列左から細谷安太郎、ブリュネ、松平太郎、田島金太郎、
後列左からカズヌーヴ、マルラン、福島時之助、フォルタン

7. ブリュネの足跡をたどる

ブリュネは、塩竈に上陸後、仙台、塩竈、石巻など当時の姿をスケッチ画に残していました。ここではこれら残された数々のスケッチ画を紹介しながら、ブリュネの宮城県から蝦夷地（北海道）鷲ノ木（現森町）までの足跡をたどります。

ブリュネが「仙台」に滞在していた時期に描かれた「仙台城の小さな谷間」と題された彩色スケッチ画があります。1868年11月（洋暦）、〈私の部屋の窓の下〉と注記され、極めて入念に描かれています。三方がうっそうと茂る樹林で囲まれ、その樹林も常緑樹と、すでに落葉した広葉樹が鮮明に描き分けられ、中央には切りだった断崖や藁葺き屋根の家屋が1軒。また、重厚な橋を渡る武者行列や河原を渡っていく武士、商人、女性、そして2人の子供が両手を広げはしゃぎながら駈けていく姿など細かく描かれています。



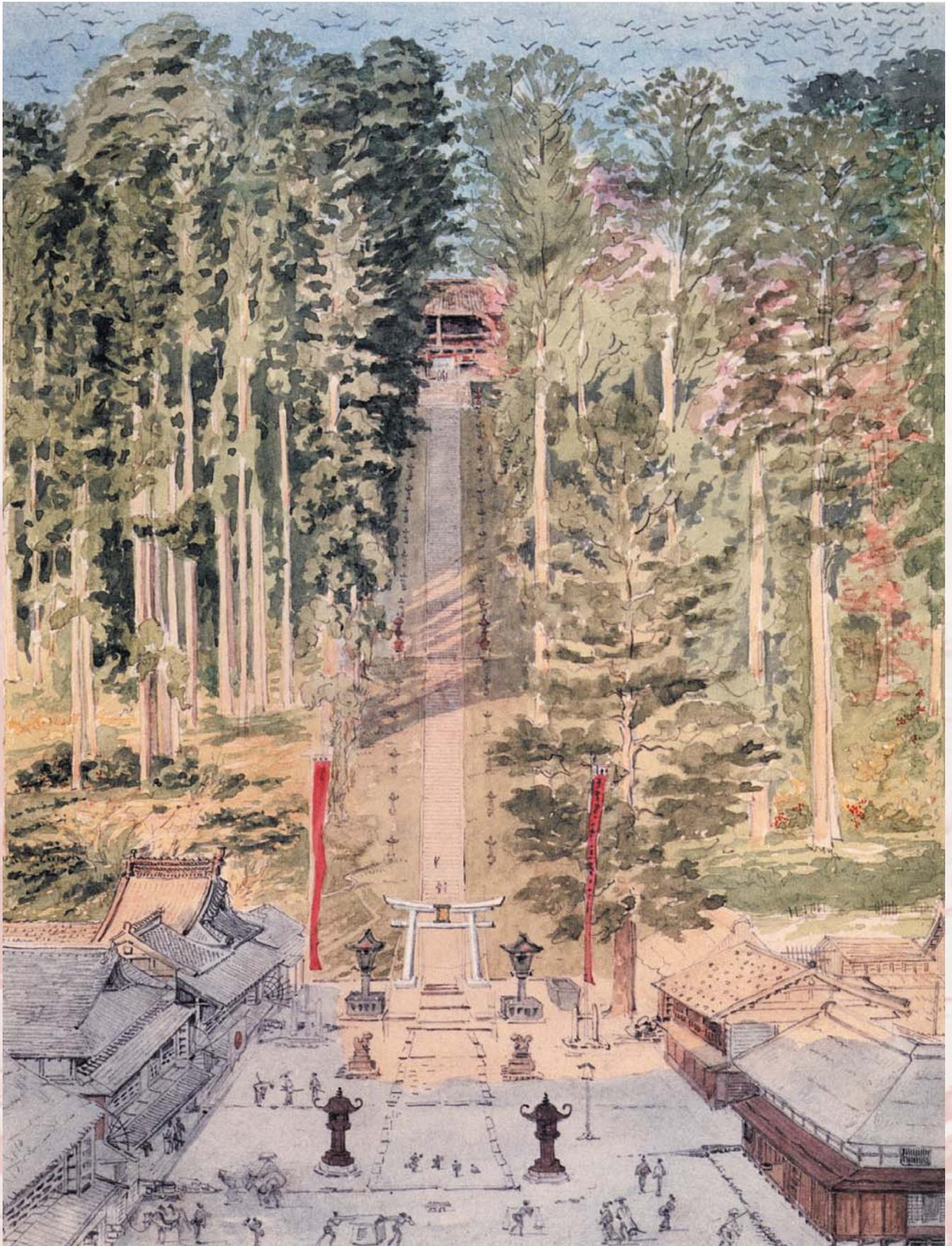
ノンブル〈14〉
仙台城の小さな谷間。私の部屋から窓の下に見える。
(仙台・1868年11月)

函館の幕末・維新
フランス士官ブリュネの
スケッチ100枚 より
2005
©クリスチャン・ポラック
提供



上図、写真左下を拡大したもの

1868年（明治元）9月、ブリュネは、現在の塩釜高校の裏側から表坂を望み、高くまっすぐにそびえる杉木立の真ん中に200段を超える石段や大鳥居。両側には遊女屋（左側・大浦楼）などの建物が軒を並べた姿や饅頭笠をかぶった武士や町人、駕籠屋や荷馬の姿など、当時の表坂の賑わいを偲ばせる光景を描いています。なお、このスケッチは、年月、場所等の記載が無く、どこを描いたものか不明でしたが、塩竈市文化財保護委員長小川澄夫氏の調査により、1988年（昭和63）8月に確認されました。

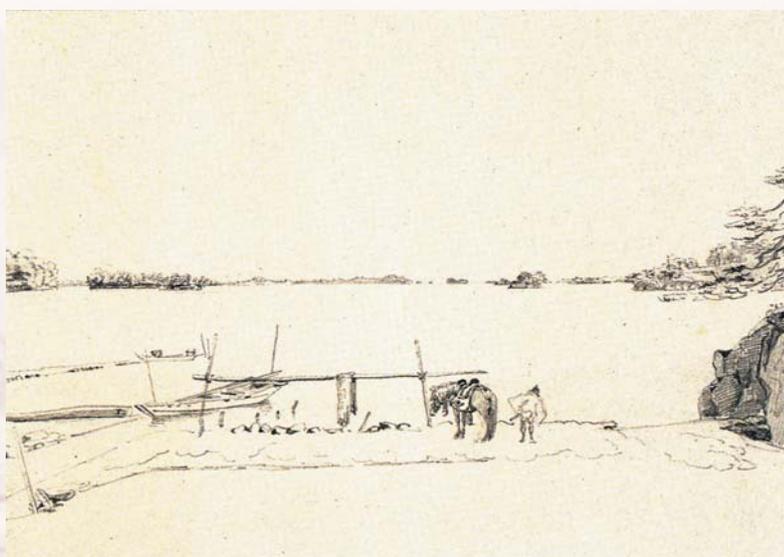


ノンプル〈15〉（日付、場所、説明の記載なし）

函館の幕末・維新
フランス士官ブリュネのスケッチ100枚 より
2005 ©クリスチャン・ポラック 提供

「鹽竈神社表坂」以降のスケッチ画には「石巻のカドノワキ」と記載されたスケッチ画まで日付等の記載はありませんが、欄外に番号（ノンブル）が打たれており、それにより描かれた順序がわかります。鹽竈神社表坂のノンブルが〈15〉、次の〈16〉には、波ひとつない静かな海^{けいりゆう}の光景が描かれ、海岸左寄りの遠くの^な棧橋と近くの川口に小さな和舟が一隻ずつ係留され、一頭の馬と1人の武士が背を向けています。

この絵には、海の沖合に大小多数の島々が連なっており、塩竈の大河岸（現・壱番館）か、松島海岸あたりから「千賀の浦」（松島湾）の群島を遠く眺めている図と思われます。ノンブル〈17〉には、「富山の寺から見た光景」という説明書が付されており、「松島富山の麗観^{れいかん}」が描かれています。ノンブル〈18〉には大きな川の上を渡舟が3頭の馬と5人の人を渡している図が描かれています。なお、この絵には「ナラシノ川、オノチクの村」と説明が記されており、石巻に向かう浜街道の「小野川（現鳴瀬川）」の舟渡しの光景を描いた図と思われます。



ノンブル〈16〉
（日付、場所、説明の記載なし）

函館の幕末・維新
フランス士官ブリュネのスケッチ100枚より
2005 ©クリスチャン・ポラック 提供



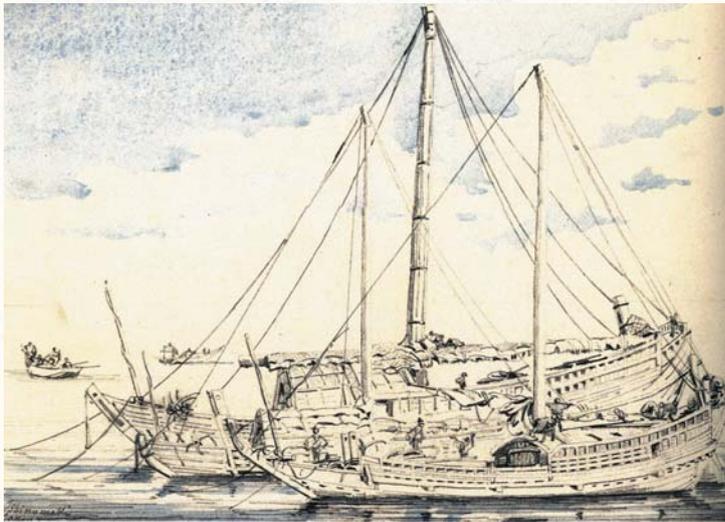
ノンブル〈18〉 ナラシノ川、オノチク村（日付の記載なし）



石巻へ向かう浜街道の図。小野川舟渡（現鳴瀬川）の記載が見える。
仙台藩御領分絵図（元禄12年）

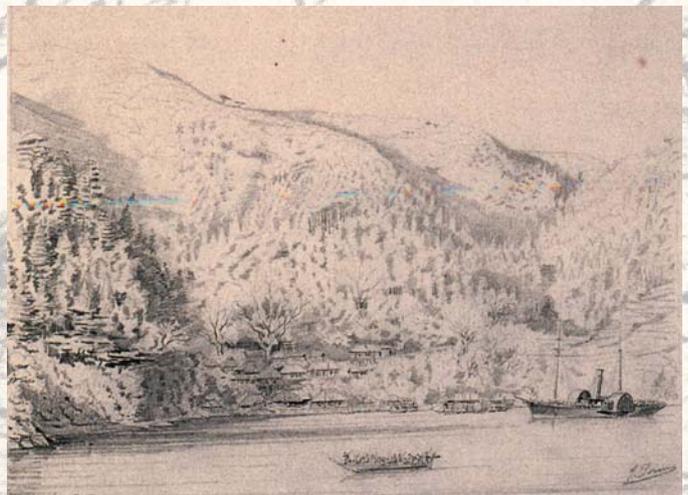
ノンブル〈19〉には、「石巻のカドノワキ」と説明が付され、太い帆柱を并財舟3隻が重なるように描かれ、当時の石巻港の賑わいを伝えていています。帆柱の一番太い舟は千石船らしく、重なった3隻の舟の一番後方に碇泊^{てい ぱく}しており、そして、遠く水平線上から広がった白雲と澄んだ空が、初冬の雰^{ふん}囲^い気を物語っています。当時の石巻港は、北上川の水運が開け、江戸への仙台米^{つみだしこう}の積出港として栄え、千石船は当時1,000隻以上が集まっていたといひます。また、石巻では艦隊集結後、乗組員であった讃岐塩泡諸島（香川県）出身の中井初次郎が、開陽丸艦上で倒れ、10月6日に帰らぬ人となりました。目撃した古老の話によれば、当地域では例を見ない盛大な葬式が営まれ、山中静翁行作（榎本らと蝦夷地に向かった幕府老中小笠原長行）の筆による墓碑銘^{ぼひめい}を刻んだ墓^もが石巻桃浦の洞仙寺^{もものうら どうせん じ}に建立されました。

ノンブル〈20〉は1868年11月26日（洋暦）と日付が記載されています。山が大きく海に迫った山麓^{さんろく}の谷間に10数軒の民家が密集し、その中央には小さな鳥居も見え、その前面には1隻の洋式汽船（長鯨丸）が碇泊しています。榎本は、旧幕府伝習隊総督大鳥圭介、新撰組副長土方歳三や星恂太郎率いる仙台藩の洋式軍隊額兵隊^{がくへいたい}を加えた約3,000人で開陽丸外7隻の船に乗り込み、石巻折ノ浜より蝦夷地（北海道）に向けて出航しました。



ノンブル〈19〉
石巻のカドノワキ
(石巻、日付の記載なし)

ノンブル〈20〉
徳川の軍艦 長鯨丸。
堀山にて（蝦夷戦争）。
(仙台・1868年11月26日)



函館の幕末・維新
フランス士官ブリュネのスケッチ
100枚 より
2005 ©ククリスチャン・ポラック
提供

榎本らは、気仙沼に一時寄港し、そこで奥羽越列藩同盟の軍務局副頭取であった仙台藩士の玉虫左太夫と落ち合うはずでした。玉虫は江戸の湯島聖堂で学び、その塾長となり、安政4年（1857年）には箱館奉行堀利熙と共に蝦夷地を調査し「入北記」を書き、日米修好通商条約の批准書交換使節団の一員として渡米した人物でした。気仙沼で塩を集め玉虫自身も蝦夷地に赴くことになっていましたが、手違いにより玉虫は前日に気仙沼を離れており、仙台に戻った玉虫は、戦争責任を問われ、自刃に追い込まれました。榎本らは、岩手県の宮古に寄港し、船の燃料となる薪や水、食料を積込み、蝦夷地に向けて出航しました。

ブリュネのスケッチ画は、ノンブル〈21〉艦上の光景、ノンブル〈22〉^{くわがさきけい} 鉦ヶ崎の景、ノンブル〈23〉宮古の停泊中の徳川の軍艦と続き、最後のノンブル〈24〉は回天が鷲ノ木に停泊中の光景を描いています。なお、ノンブル〈24〉が、ブリュネが日本を描いた最後のスケッチ画となりました。



ノンブル〈21〉
ドンバルトン号の甲板にて
(日付・場所の記載なし)

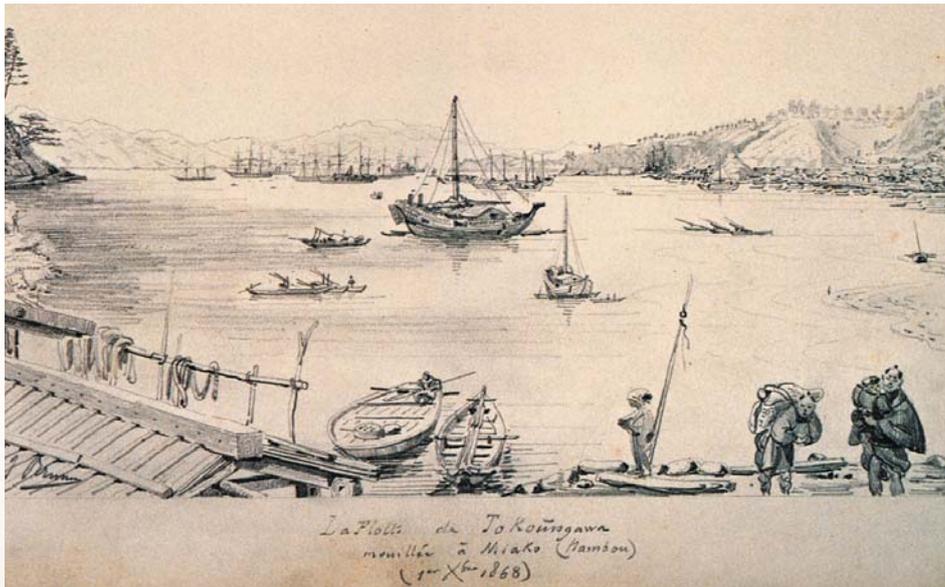
37名の種々の職業の人々が描かれている。



ノンブル〈22〉
クナンヶ崎（宮古の近く、南部）。
(1868年11月29日)

宮古湾鉦ヶ崎港を望見したと思われる画

函館の幕末・維新 フランス士官ブリュネのスケッチ100枚 より
2005 ©クリスチャン・ポラック 提供



ノンブル〈23〉
宮古に止まっている徳川の軍艦。
(南部・1868年12月1日)

宮古湾口に碇泊する千石船の奥に洋式の榎本艦隊8隻が描かれている。



ノンブル〈24〉
蝦夷出兵。サワラに着いた回天丸。
(蝦夷・1868年12月4日・聖ハーブの日)

鷲ノ木沖に碇泊する回天とその後方には駒ヶ岳が描かれている。サワラ（砂原）と記されているが、榎本艦隊が最初に予定していた停泊地が砂原であったためと思われる。

なお、ブリュネが日本に関して最後に残したスケッチ画でもある。

函館の幕末・維新 フランス士官ブリュネのスケッチ100枚 より
2005 ©クリスチャン・ポラック 提供

8. ブリュネ、軍人としての生涯

ブリュネは五稜郭が落城する18日前に、箱館港に停泊中のフランスの軍艦コエトロゴン号に乗船しました。箱館戦争終結後の2ヶ月後、フランスに強制送還され、裁判にかけられることになりましたが、ブリュネが脱走前にナポレオン三世に対して送った手紙が国内の新聞に掲載され、大きな反響を呼んでいました。帰国後、国民から大きな称賛と歓迎で迎えられ、罪には問われませんでした。普仏（プロセイン王国とフランス）戦争に際しては正式に軍に復帰して、最後は参謀総長に就任し、1911年（明治44）パリ郊外の自宅にて72歳でその波乱の生涯を閉じました。ブリュネは明治天皇より「勲二等旭日賞」という、外国人に対しての最高位の勲章が授与されています。この勲章授賞を天皇に奉上したのは榎本武揚だったと云われ、また、米映画「ラスト

サムライ」の主人公ネイサン・オールグレン大尉のモデルになったのは、ブリュネであると云われています。



子孫宅に残る15代将軍慶喜より拝領した小刀（左写真下）
ブリュネは、徳川幕府最後の将軍慶喜の肖像画も描いています。

パリ東墓地にあるブリュネの墓碑



咸臨丸子孫の会 提供

9. 開陽丸『鷺ノ木沖』に投錨 榎本ら五稜郭へ入場

榎本艦隊は、1868年（明治元）10月20日（洋暦12月4日）に、内浦湾鷺ノ木沖（現森町）に到着しました。吹雪の中、陸兵が上陸し箱館に向けて進撃を開始します。そして26日旧幕府軍は、五稜郭を占領。榎本は、開陽丸に乗船し、11月1日に箱館に入港し、21発の祝砲とどろく中、五稜郭に入場しました。



10月20日鷺ノ木着船之図

函館市中央図書館 蔵



榎本艦隊上陸の碑と駒ヶ岳

鷲ノ木 (現北海道森町)



史跡公園内に有る箱館戦争鷲ノ木戦没者之石碑

鷲ノ木 (北海道森町)



史跡公園内に有る榎本艦隊上陸の石碑
鷲ノ木 (北海道森町)

榎本軍鷲ノ木上陸地跡

明治元年(一八六八)旧十月二十日、噴火湾中央部の鷲ノ木村に榎本武陽(徳川旧臣)率いる艦隊が上陸しました。上陸時の鷲ノ木は、積雪三〇〇、北西の強風で波は荒れ(夕八風)暴風雪であったといわれる。

榎本艦隊は、旗艦開陽丸ほか七艦(開天、雄飛、長鯨、神速、風風、回春、大江)で、このときの人員は、榎本をはじめ松平太郎、大島圭介、土方歳三、古屋佐左衛門ら二十人以上と言われ、上陸したのは主に陸兵でした。

当時の鷲ノ木村は戸数約一五〇、人口約八〇〇で茅葺街道の要所でもあり、箱館への交通も開けていました。

二十一日、人見勝太郎以下三十二名の先発隊が峠下村(現七飯町)で持ちかまっていた官軍と激戦となり、箱館戦争へと展開していくこととなります。開戦とともに鷲ノ木村は榎本軍の後方陣地となり、高森台場(現東森)、石川原沢口台場(現富士見町)、湯ノ崎台場(現鷲ノ木)などが構築されました。

こうして、明治二年五月の、箱館戦争終結までは負傷者や病人達の療養場となり、また戦死者は、霊雲院に手厚く葬られました。

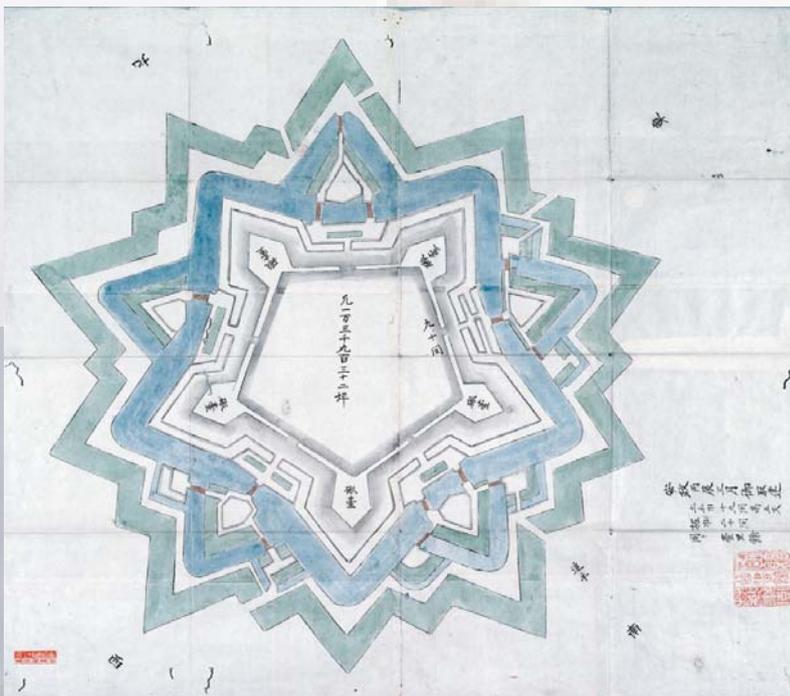
今も鷲ノ木の墓地には榎本軍戦死者たちが眠っており、史跡公園内には上陸記念碑や慰霊碑などがあります。

平成二年七月三十日

森町教育委員会

史跡公園内に有る榎本艦隊上陸の案内板

鷲ノ木 (北海道森町)



五稜郭図面「亀田御役所土壘」

函館市中央図書館蔵



五稜郭に入場する榎本武揚 (復元模型)



箱館奉行所（復元模型）



箱館奉行所 函館市中央図書館 蔵

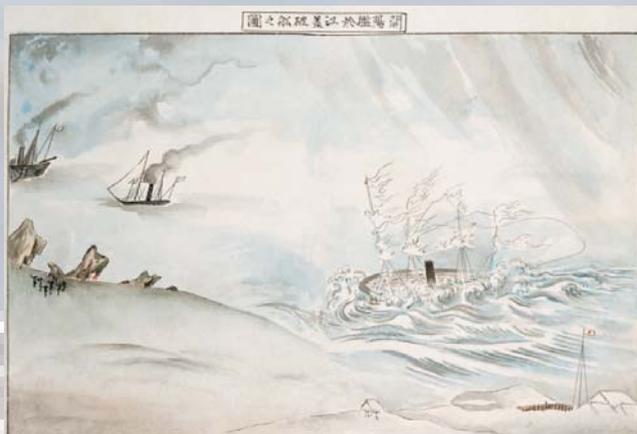


五稜郭

H21年2月 撮影

10. 『開陽丸』 江差沖に眠る

松前藩の出方を窺っていた榎本らは、土方歳三以下800人を松前に進軍を開始し、1869年（明治2）1月5日に開城を果たします。松前藩では、西部の要衝であった江差を最後の防衛線として必死の抵抗を示しました。榎本は、開陽丸に乗船し箱館を出航、15日に江差沖に到着しました。江差弁天島、愛宕山の台場に砲撃を加え占領しますが、夜9時頃より激しい風雪波のため開陽丸はどんどん陸側に流され座礁してしまいます。その10日後、榎本や土方らが見守る中、開陽丸のオランダでの愛称であった新しい時代の「夜明け前」にその英姿を海中に沈めました。開陽丸の沈没は榎本軍の海事力を大きく低下させると同時に、彼らの士気も大きく落ち込ませることになり、海上戦力の優位が一挙に崩れた榎本軍は、1869年（明治2）5月に新政府軍に投降し、ここに、戊辰戦争が終結します。



開陽艦於江差破船之図 「麦叢録」より



江戸末期の江差 江差町教育委員会 提供
函館市中央図書館 蔵



明治期の江差



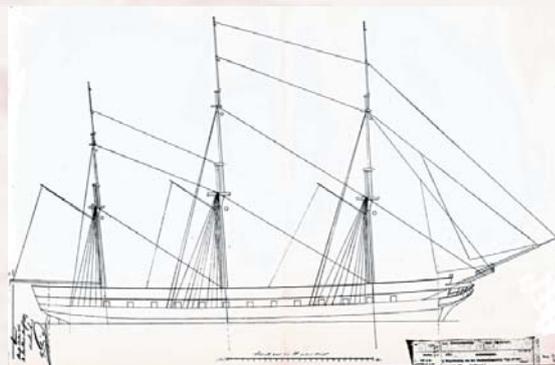
11. 幕末最強の軍艦『開陽丸』

開陽丸の建造は、オランダ貿易会社（以下、N.H.M）で受注し、オランダ海軍の支援により、王立蒸気船機関局ホイヘンス大佐を軍艦建造顧問として迎え、ロッテルダムのオランダ蒸気船会社で立案設計されました。そして、ドルトレヒトのヒップス・エン・ゾーネン造船会社で建造され、1865年（慶応元）11月2日に進水式が行われました。



開陽丸

江差町教育委員会 提供



開陽丸の設計図

開陽丸の概要

船形	シップ型3本マスト・補助エンジン付き
排水量	2,590トン
最大長	72.80m（バウスピリットを含め、81.20m）
最大幅	13.04m
吃水深（前部）	5.70m
（後部）	6.40m
帆面積	2,097.8㎡
補助エンジン	400馬力蒸気機関1基（トランク・スチームエンジン）
速力	10ノット（汽走時）
標準装備	大砲26門（うち18門は、16センチクルップ砲） 後に9門が追加され35門になった。外には小型のプロンズ・ホーウィツェル砲 など付属砲8門
乗組員	350～500人
設計者	J.W. Lフォン オール (van Oordt)
造船所	ドルトレヒト市ヒップス・エン・ゾーネン造船会社 (C. Gips en Zonen)
キール据付式	1863年（文久3）9月13日
進水式	1865年（慶応元）11月2日
貿易会社への引き渡し	1866年（慶応2）9月10日
幕府への引き渡し	1867年（慶応3）6月22日

12.

『開陽丸』の遺品を発掘・復元

北海道江差町では、大正7年に開陽丸の大砲2門と錨1丁いかりを引揚げた以来、江差の人々に親しまれ、戦後、開陽丸の在りし日の姿を再現し、引揚げたいとの気運の声が高まり、昭和49年に海底遺跡として国の特別史跡の指定を受けました。

本格的な発掘作業を、昭和50年より昭和63年に実施し、その遺物の総数は、武器兵器関係10,131点、船体船具関係18,161点、生活用品4,613点、総計32,905点にのぼります。また、平成2年には実物大の開陽丸が復元されました。



復元された開陽丸（北海道江差町）



海底図取り



クルップ砲の引揚げ



130年前の巨砲の引揚



30ポンド短カノン砲



ライオンの装飾（引き戸の取手）



大量の砲弾
江差町教育委員会 提供

編集後記

このたび、みなとの歴史ミニ博物館「幕末最強の軍艦 開陽丸と塩竈」のパネル展の開催及び図録を発刊することができました。

昨年は、榎本武揚の没後100年、戊辰戦争勃発から140年と節目の年でありました。7月18日には、開陽丸の航跡を辿る大阪市帆船「あこがれ」の塩釜港入港に際し、塩竈市を初め市内の諸団体の皆様及び帆船あこがれ運航石巻実行委員会の皆様のご協力を得て、入港歓迎式典、船内一般公開を開催させていただきました。

半日の開催にもかかわらず、幼稚園児からお年寄りの方まで、約500名の方々が見学に乘船し、榎本武揚や開陽丸と塩竈の関わり的一端をご紹介させていただきました。

今回のパネル展は、戊辰戦争が終結して140年の節目の年に、歴史の一大転機であった明治維新の舞台として深く関わっていたにも関わらず、あまり語られていない港町「塩竈」の姿を市内外の多くの方々に知っていただくことにより、塩竈への愛着を育てていただければという思いから開催したものであります。

なお、この図録の作成及びパネル展の開催にあたっては、日本財団の助成をいただき、また日仏歴史研究家であるクリスチャン・ポラック様をはじめ、(財)開陽丸青少年センター飯田館長様のご指導及び、江差町・石巻市両教育委員会、函館市中央図書館、咸臨丸子孫の会の小杉様、石巻千石船の会の本間様などの諸団体のご厚意により、貴重な資料及び遺品の展示について快くご承諾いただき、この場をお借りして心から厚く感謝申し上げます。

平成21年3月吉日

特定非営利活動法人
NPOみなとしほがま

- | | |
|----------|--|
| ■パネル展 | 港の歴史ミニ博物館「幕末最強の軍艦 開陽丸と塩竈」 |
| 日 時 | 平成21年3月2日～26日 午前9時から午後6時 |
| 場 所 | マリゲート塩釜1F 展示ギャラリー |
| 日 時 | 平成21年3月28日～4月24日 午前10時から午後6時 |
| 場 所 | イオン塩釜ショッピングセンター内 マリンプラザ(塩竈市情報・交流コーナー) |
| 主 催 | 特定非営利活動法人 NPOみなとしほがま |
| 後 援 | 塩竈市・塩竈市教育委員会 |
| 協 力 | 江差町教育委員会・(財)開陽丸青少年センター
函館市中央図書館・石巻市教育委員会・咸臨丸子孫の会
石巻市千石船の会・©クリスチャン・ポラック (日仏歴史研究家) |
| ■遺品展示協力 | 江差町教育委員会・(財)開陽丸青少年センター |
| ■図録(小冊子) | 「幕末最強の軍艦 開陽丸と塩竈」 |
| 発行日 | 平成21年3月1日 |
| 協力 | 江差町教育委員会・(財)開陽丸青少年センター
函館市中央図書館・石巻市教育委員会・咸臨丸子孫の会
石巻市千石船の会・©クリスチャン・ポラック (日仏歴史研究家) |
| 構成・編集・制作 | 〒985-0016宮城県塩竈市港町一丁目4番1号 |
| 発行・著作 | 特定非営利活動法人 NPOみなとしほがま |

理事長 三升 正直
TEL 080-1833-3710

※不許複製無断引用